

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

中学生の部 最優秀賞 受賞作品

「かたことの日本語が伝えるもの」

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校 1年

宮原 皐熙

かたことの日本語が伝えるもの

大阪教育大学附属池田中学校 一年

宮原 皐熙

僕の祖父母は台湾人です。

祖父母は、台湾が日本の植民地だったときに生まれました。だから台湾語のほかに、日本語をしゃべることができます。旧日本軍の占領時代に教えられたものです。祖父母だけではなく、台湾の高齢者はほとんどいいほど日本語をしゃべることができます。

普通、占領時代に教えられた母語でもない言語は嫌な思い出として心に残りそうですが、台湾の人々は、日本語に親しみを持っていて、日本人がいない場面でも、日本語で日常会話をする人もいます。僕の祖父母もそうした台湾人です。

祖父母との会話では、少し想像力が必要です。アクセントや表現が、日本で聞きなれた日本語とは違っていているからです。「もち」や「りんご」「ばなな」のアクセントが違っていて、「もち」や「りんご」では「も」や「り」にアクセントが来ていて少し解りづらくなったりするからです。また、台湾語の表現の影響で、「異なっている」という意味をあらわす時に「同じくない」という表現を使ったりします。

けれども、祖父母の話し方をよく聞いていると、今僕たちが使っている日本語に比べて、とてもきれいな響きを持つていることに気がつきます。例えば、「こうき、りんご食べますか」とか、「こうき、その服、よく似合っているね」とか、とても穏やかに話しかけてくれます。

そんな時、僕も、祖父母に話しかける日本語が穏やかでわかりやすい日本語になっているか気をつけます。

例えば、運動会に出る種目を聞かれた時、日本では「大玉ころがし」というところですが、わかりやすくするために、「大きな玉を全員で手を使って頭の上を運ぶゲーム」という風になります。

また、桃太郎の話は次のようになります。

「ある村におじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんは山に木を切りにいきました。おばあさんは川へ着物を洗いにいきました。おばあさんが川で着物を洗っていると、大きな桃を見つけました。おばあさんは大きな桃をうちに持って帰りま

した。そして、おじいさんと一緒に大きな桃を割ってみました。すると、桃の中から男の子が出てきました……」

この話では、わかりやすくするために文を短く切って、物事の起こりと結果だけで構成するようにしています。また、擬態語や代名詞もなくて、誰にでも理解しやすい日本語に工夫しています。

実は、このような「かたことの日本語」が僕にとっての「美しい日本語」です。確かに、敬語や擬態語を使わなかったりすると、日本独特の価値観も失われたりして、普通、日本人の思っている「美しい日本語」とはかけ離れているかもしれません。けれども、言語の壁を越えて、なんとか人とわかり合いたいという気持ちは、心の通った本当の意味での美しい言葉、穏やかな言葉を生み出すと思います。

今の僕は、日本語を「流している」ように思えます。流暢に日本語を話しさえすればいいと思っていました。けれども、祖父母と会話していて、なんとか伝えたいという気持ちがあれば、ぎこちない「かたことの日本語」だからこそ気持ちを伝えることができると思います。

現在、日本には世界のさまざまな国から来た人が生活をしています。日本人は、外国人と話す時に、英語などの外国語を使わなければいけないと思いついてるかもしれませんが、僕は、外国人と日本語で積極的に会話していきたいと思っています。外国人の「かたことの本語」に耳を傾け、話す時はわかりやすい言い回しを使って、はつきりとした口調で話したいと思います。

同時に、僕もぎこちなくてもいいので、外国の人と相手の国の言葉で話したいと思いません。いろいろなかたことの言語で、気持ちや考え方を伝えようとすることによって、日本語はさらに美しい言語になるのではないかと思っています。